

戦跡観光と記念碑

高山 陽子

1. はじめに

戦跡は、観光地の一つである。関ヶ原や川中島は古戦場として様々な作品に登場し、ワーテルローやソム、ガリポリなど近代戦争の激戦地は19世紀から海外旅行の一部に組み込まれてきた。戦跡への観光は、かつては、死の観光 (thanatourism) や戦場観光 (battlefield tourism) と呼ばれていたが、レノン&フォリー (John Lennon and Malcolm Foley, 2000) がダーク・ツーリズム (dark tourism) という言葉を用いてから、戦跡を含む「負の遺産」と呼ばれる場所への観光は、この言葉が用いられるようになってきた¹⁾。

従来の観光で対象となっていたのは、風光明媚な場所や歴史的建造物などであった。20世紀後半になると、大量の観光客が押し寄せることによる環境への付加が問題となり、エコツーリズムといったもう一つの観光 (alternative tourism) が模索された。その中で、農業体験やボランティア活

写真1 ホロコースト博物館



動、医学的治療などの体験が観光資源と見なされ、農業観光やスタディ・ツアーといった観光形態が生み出されていった。ダーク・ツーリズムは、こうした多様な観光資源の中でも最もダークな部分、すなわち、人の死や暴力に焦点を当てている点で特殊な観光形態である。

人の死をどのように表現し、後世に伝えるか。これは、多くの社会において宗教儀礼を通して行われてきたものである。近代メディアが登場する前であれば、個人の死は墓碑や位牌によって表され、戦場は絵画や文字資料を通して残されてきた。19世紀に入ると、戦争や災害は、写真や映像によって生々しく報道・記録されるようになった。人の死を記録した近代メディアは、鑑賞する人々に出来事を強烈に印象付ける効果を持っている。

この効果を利用した博物館の代表は、ワシントンDCのホロコースト博物館（Holocaust Memorial Museum）である【写真1】。ワシントンDCとホロコーストには直接的な因果関係はないため、この博物館がなぜこの場に建設されるのかが議論された。激しい議論があったものの、1993年に開館してからは連日、多くの見学者が訪れ、ナショナル・モールの一博物館として定着した。

この博物館の特徴は、現代の映像技術を駆使した多様なビジュアル資料

写真2 原爆ドーム



写真3 平和祈念像と平和の泉



である。最初にエレベーターで4階に到着すると、ナチが政権を握るまでの様子が丁寧に映像で説明される。それから3階に下りると、アウシュヴィッツのバラック小屋のレプリカが眼に入る。見学者は、収容所に連行されるまでの人々の様子をパネルや映像で見た後に、木造列車のレプリカを通過してバラック小屋を通るように道筋が決まっている。2階には、ユダヤ人を救った人々の名前と顔を記したパネルなどが展示されている。見学者は、最後には記憶のホールへと導かれる。

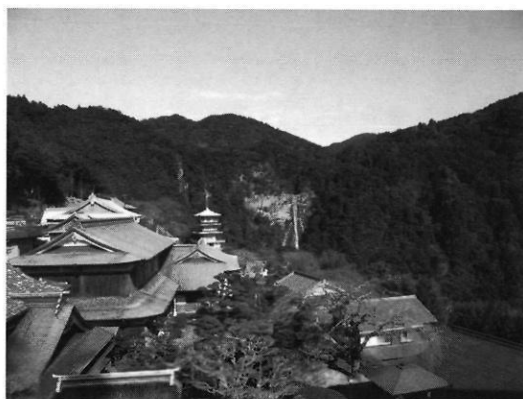
ホロコースト博物館は、ダーク・ツーリズムの特徴を極めて顕著に示している。それは、映像資料と疑似体験によって作り出される記憶が観光の主軸の一つとなっている点である。その記憶は、博物館内の決められたルートに従って歩いてゆくと自然に得られるように設計されている。決められたルートは、ある一つの歴史の筋書きをなぞってゆくかのようなものである。ホロコースト博物館は「新たな知識を得るためというより、もともとから支持している考え方を確かめ、強いる、いわば巡礼の地」であり、これは、広島原爆記念館と共通すると指摘される²⁾。

戦争の体験や記憶は個人によって異なる。例えば、前線で戦った体験を持つ退役軍人が戦地を訪れる場合と、戦争体験を全く持たない若者が戦争の

写真4 恐山



写真5 青岸渡寺



歴史を学ぶために戦地を訪れる場合では、訪問の動機や現地での感想などは違ってくる。この違いはそのまま存在し続けるのではなく、観光地化に際して、ある一つの方向へ収斂する傾向を持つ。大きな出来事が起こったという記憶は、記念碑建立へとつながり、人々はその記念碑を目印として、巡礼に類似した行為を取る。記念碑は特定の意図をもって制作されたものであるた

め、その大きさやデザイン、位置などがその場所の性格を形成し、人々に固定化したイメージを抱かせる。例えば、広島原爆ドームは永久保存されることで広島のシンボルとなり【写真2】、長崎平和公園の「右手が原爆の脅威を左手が平和を示す」という平和祈念像（1955年、北村西望制作）は長崎のシンボルとなっている【写真3】。本稿では、こうした各地の記念碑建立の事例を通して、記念碑と戦跡観光の関連を考察する³⁾。

2. 戦地巡礼

戦地巡礼は、ダーク・ツーリズムの初期形態であると見なされている⁴⁾。巡礼とは、特定の信仰に基づいて聖地や霊場を巡拝する行為であり、イェルサレム、ローマ、サンティアゴ・デ・コンポステーラはキリスト教の三大巡礼地として、メッカやメディナはイスラム教の巡礼地として知られている。日本三大霊山の恐山、比叡山、高野山は古くからの日本の巡礼地であり、熊野の青岸渡寺を第一番札所とする西国三十三所や徳島の霊山寺を第一番札所とする四国八十八所などには、現在でも多くの人々が巡礼に訪れる【写真4】【写真5】。人々がこれらの場所を訪れる動機は、贖罪や病気治療、物見遊山など多様であるが、その動機の一つに死者を弔うことが挙げられる。

兵士の死を追悼することが戦地巡礼の本来の目的とされた。しかし、宗教的巡礼と同様に、戦地巡礼の動機も祖国の栄光の確認といったナショナリズムに基づくものや物見遊山へと拡張していった。そこには、西洋諸国のナショナリズムの台頭といった政治的背景や19世紀半ばに始まったマス・ツーリズムが近代社会へ浸透したという社会的背景が存在する。近代戦争が増加するにつれて、兵士の死は一個人の死ではなく、祖国のために犠牲になった英雄であるという解釈が加えられ、戦地巡礼は、宗教的・倫理的に望ましいだけでなく、政治的に正しい行為であり、ベルギーのワテルローやアメリカのゲティスバーグなど戦勝国に劇的な結果をもたらした戦場は、国民的な聖地と見なされるようになっていった。

イギリスでは、早くから戦跡に観光地としての価値を見出していた⁵⁾。貴族の子息たちが大陸へのグランド・ツアーを盛んに行っていたところに起こったワーテルローの戦いでは、実際に戦場を鑑賞した人々もいた。1815年6月16日、ナポレオン率いるフランス軍約12万5000とウェリントン率いるイギリス軍約9万5000およびブリュッシャー率いるプロイセン軍約12万がワーテルローで対峙し、6月18日、4万人の戦死者を出したナポレオンが敗北した。この歴史的な戦争を見学した有名・無名のイギリスの作家たちは、混乱した戦場の様子を公表し、それが、また新たな観光客を呼び寄せることとなった。ワーテルローのシンボルであるライオンの丘は1826年に完成し、ワーテルローはイギリス人にとっての聖地となっていった⁶⁾。

トマス・クック&サン社（通称、クック社）は、1851年のロンドン博覧会へのツアーを成功させると、1855年以降、大陸へのツアーを企画し、二回目の大陸旅行にワーテルロー訪問を組み込んだ。ワーテルローの戦いに参加した軍曹をガイドと呼び、臨場感あふれる解説を行ったと報告されている⁷⁾。第一次大戦後、海外旅行の制限が解かれると、クック社は1920年代から30年代にかけて多くの戦跡見学のバスツアーを実施した。クック社はツアーの実施に前向きではなかったが、観光客は平和の到来を感謝するために行くのである、あるいは、死者の魂を鎮めるために行くのであると正当化した⁸⁾。

1937年のピーク時には戦跡を訪れる観光客数は143万人にもなった。人々が訪れたのは、第一次大戦の最大の会戦地となったフランスのソンムや、三度に渡って戦いが繰り広げられたベルギーのイーブル、初めてオーストラリアとニュージーランドが海外へ軍隊を派遣したトルコのガリポリなどであった。戦跡観光は、観光をメインにしたものと、慰霊をメインにしたものに大別された。また、チャーチ・アーミー（the Church Army）や救世軍（the Salvation Army）、YMCAは遺族たちに対して慰霊の旅を積極的に組織した⁹⁾。

ワーテルローを訪問するイギリス人と同じように、オーストラリア人とニュージーランド人はガリポリを訪問した¹⁰⁾。ガリポリは、1915年4月25

写真6 アーリントン墓地



写真7 無名兵士の墓



日、オーストラリアとニュージーランドの部隊アンザック（Australian New Zealand Army Corps）が上陸した場所であり、4月25日はアンザック・デイとして毎年、アンザック・ツアーが開催されている。ガリポリは、「ニュージーランドが世界の舞台に立ち、厳しい環境の中で勇敢に戦ったことをニュージーランドの名を轟かせた」¹¹⁾ という歴史上の意義を持ち、20世紀

写真8 無名兵士の墓



写真9 ヴィットリオ・エマヌエーレ2世記念堂



初頭に独立したオーストラリアとニュージーランドにおいて、建国の物語を想起させる場所である¹²⁾。多くの人々が熱狂的にガリポリを訪れる中でガリポリ神話は形成され、ガリポリは聖地となっていったのである。

3. 聖地の拡大と英雄の誕生

戦場に加えて無名兵士の墓も国民的な聖地となった。アメリカのアーリントン国立墓地（Arlington National Cemetery）にある無名兵士の墓は聖地であり、ここで毎日行われる衛兵交代は、神聖な儀式と見なされている【写真6】。このような無名兵士の墓は、第一次大戦後の欧米諸国に次々と登場した。死者の追悼・慰霊という個人的な行為をどのように集合的に行うかという問題に直面した近代国家は、人々が追悼の意を表すると同時に、愛国心を掻き立てられるような墓を作り、そこで儀礼を行った。それは、「無名兵士の墓と碑、これほど近代文化としてのナショナリズムを見事に表象するものはない」¹³⁾ ためであった。

フランスは、パリのエトワール凱旋門を選び【写真7】、イタリアは、ローマのヴィットリオ・エマヌエーレ2世記念堂を選んだ【写真8】【写真9】。1836年に完成したエトワール凱旋門は、19世紀半ばのオスマンによる

写真10 セノタフ



パリ改造計画で登場したシャンゼリゼ通りとつながる新しいパリのシンボルであり、無名兵士の墓として場所としても建造物としてもふさわしいものであった。一方、ヴィットリオ・エマヌエーレ2世記念堂は、1870年にイタリア統一を成し遂げた初代イタリア国王ヴィットリオ・エマヌエーレ2世を顕彰したもので、1911年に除幕式が行われた。20世紀に誕生したこの巨大な建造物は、周辺のコロセウムやフォロ・ロマーノなどのローマ時代の遺跡

写真11 国立砲兵戦争記念碑



写真12 帝国の騎兵



と不釣り合いであると批判されたが、まもなく訪れる全体主義芸術を予感させるものであった¹⁴⁾。二つの建物は、第一次大戦以前からそれぞれの都市を代表するものであった。

イギリスの無名兵士は、ウエストミンスター寺院に一時的に埋葬された。しかし、すでに多くの著名人が埋葬されていた寺院には、無名兵士を祀るための儀礼的空間を確保することができなかつたため、ロンドンに新しく記念碑が建立された。セノタフ（Cenotaph、第一次大戦戦没者記念碑）と呼ばれるこの記念碑は、ギリシア語の「空の墓」に由来し、1920年、エドウィン・ラチェンズ（Edwin Lutyens）によって設計された【写真10】。この簡素な記念碑には、第一次世界大戦の戦没者を慰霊するために、「栄光ある死」（The

写真13 ゴードン像



Glorious Dead) と刻まれた。国王ジョージ5世が1920年11月11日（休戦記念日）に除幕式を行った後、セノタフには3日間で40万人が訪れた。セノタフは、単に戦没者をするためだけの目的で作られたのではなく、戦争は大義のために必要不可欠であったというイデオロギーを示す目的があった。戦没者たちはセノタフの建立と式典を通して、英霊へと変貌していった¹⁵⁾。

セノタフのような非宗教的な記念碑が作られたものの、兵士の勇敢さを示すような人物像や、宗教色の強い記念碑は戦前と変わらずに制作され続けた。王立砲兵戦争記念碑 (Loyal Artillery War Memorial) は、ロンドンのハイド・パーク・コーナーに1920年に建立されたもので【写真11】、ブロンズの4体の砲兵のうち、3体は立像の姿、残りの1体は死者の姿で描かれている。中央の大理石製の野砲はソンムの戦いを記念している。1924年にハイド・パークに作られた帝国の騎兵 (Cavalry of Empire) は、ドラゴンを倒す聖ジョージの姿で描かれている【写真12】。これらの古典的なデザインは、戦車や戦闘機が登場した第一次大戦以前の戦争において騎兵が重要な役割を

写真14 ウェリントン像



写真 15 フリードリヒ像



写真 16 勝利記念塔



果たしていたことを表現している¹⁶⁾。

第一次大戦の記念碑が建立されると、近代国家の首都は、ますます記念碑であふれかえるようになった¹⁷⁾。近代戦争は国民的英雄を作り上げ、それまでの広場や公園に建てられていた王侯貴族の顕彰像にとって代わった。19世紀後半にロンドンのテムズ川沿いに作られたヴィクトリア・エンバンクメント・ガーデンズには、現在、26の記念碑が並んでいる。その中に国民的英雄のゴードン（Charles George Gordon）像がある【写真13】。ゴードンは、クリミア戦争や太平天国の乱に際して従軍し、1884年にスーダンの反乱を鎮圧するためにハルツームへ赴いた。しかし、ゴードンの部隊は反乱軍に包囲され、1885年1月、援軍が到着する二日前に全滅した。死亡したゴードンは英雄として紹介され、1887年、国家予算を投じて銅像がトラファルガー広場に作られた¹⁸⁾。

ゴードン像は政府が建てたものであったが、多くの銅像の建立は主に民間団体が行っていた。それは、銅像を建てることがウエストミンスター寺院やセント・ポール寺院に埋葬するよりもはるかに容易であったためだという¹⁹⁾。ワーテルローの戦いで活躍したウェリントン（Duke of Wellington, Arthur Wellesley）像は1887年、ハイド・パーク・コーナーに建立された【写

写真17 ビスマルク像



写真 18 ノイエ・ヴァッヘ



写真 19 ピエタ

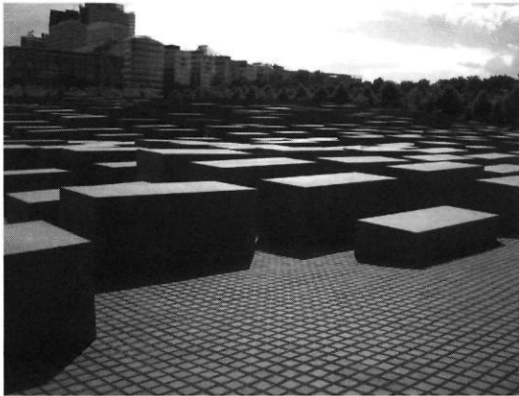


真 14】。19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて野外の銅像は増え続け、1928 年には 350 以上にもなった。銅像が増えるにつれて銅像巡りの旅を行う旅行者も増え、数種類のガイドブックが出版された²⁰⁾。

ベルリンのフリードリヒ大王像は、王侯貴族の顕彰碑から国民記念碑へ

の過渡的な記念碑であるとされる【写真15】。記念碑建立が計画された1786年当時は、国王を私的に顕彰するものであったが、建設が遅れ、ナポレオン戦争を経験すると、戦争で戦った軍人も顕彰の対象に含まれると解釈され、19世紀半ばに竣工した際には国民記念碑の性格を帯びようになった²¹⁾。デンマーク、オーストリア、フランスとの戦いに勝利したドイツには、次々と国民記念碑が建設された。1872年にデアガルテンに建設された勝利記念塔(Siegessäule)【写真16】の周辺には、モルトケ(Helmuth Karl Bernhard Graf von Moltke)、ローン(Albrecht Theodor Emil Graf von Roon)、ビスマル

写真20 ホロコースト記念碑



ク(Otto von Bismarck)の像が勝利を祝うかのように並んでいる【写真17】。このような寓話的な人物で装飾されたフランス様式の像では、当時、高まりつつあったビスマルク信仰を十分に具現化することができないと考えられ、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ネオ・ロマネスク様式を取り入れた巨大な花崗岩のビスマルク像やビスマルク塔が建立されていった。ブロンズのように人工物ではない花崗岩は、ゲルマンの力強さや簡素さを表現するのに適していると見なされた²²⁾。

20世紀になると勝利記念塔に代わり、戦没者追悼施設が登場した【写真

18]。現在、ノイエ・ヴァッヘ (Neue Wache) と呼ばれる建物は、第一次大戦後、世界大戦戦没者記念館となった。1933年には、戦没者顕彰碑と改名し、戦没者を英雄として称える施設となったが、戦後、東ベルリン市がファシズムおよび両大戦犠牲者のための警告記念碑と改名し、1993年11月14日、ドイツ中央追悼所となった。内部には、ケーテ・コルヴィッツ (Käthe Kollwitz) による「死せる息子を抱く母」(ピエタ)があり、その前には「戦争と暴力支配の犠牲者たちに」という文字が刻まれている【写真19】²³⁾。

この1993年のノイエ・ヴァッヘの改修は、新しい記念碑の論争を引き起こした。ノイエ・ヴァッヘには、ユダヤ人犠牲者だけではなく、ドイツ兵や1953年6月17日の東独労働者蜂起の犠牲者も追悼対象に含まれていたため、ユダヤ人とロマがこの改修に激しく反対した。ユダヤ人協議会議長ビーブス (Ignata Bubis) は、除幕式に出席する条件として「ヨーロッパで殺害されたユダヤ人のための記念碑」(通称、石碑のフィールド、ホロコースト記念碑)の建設を提示した。記念碑は2005年にブランデンブルク門の近くに建設されたが【写真20】、そのコンペが一度挫折するなど、記念碑建設を巡る議論は10年以上も続いた²⁴⁾。そこには、記念碑が持つ政治的側面が深く関わっている。20世紀前半までは比較的容易に記念碑を建てるのが可能であっ

写真21 ベトナム戦没者記念碑



たが、次第に記念碑建立は論争の火種となっていった。すでに近代国家の都市は記念碑のインフレ状態にあり、これ以上の記念碑を建てる必要があるのかという疑問が出されたほか、ホロコーストや大量の原爆被害者などをどのように表現するかという問題へと拡大していったのである。

4. 集積する記念碑

第一次大戦後、戦争記念碑を制作した芸術家たちの念頭には、勝利の高揚感と死者への追悼という二つのモチーフが存在していた。多くの記念碑はこの二つのバランスの中で制作された。例えば、追悼の意味合いが強い記念碑は抽象的で簡素なデザインになる傾向があり、戦死者を英雄として礼賛する意味合いが強い記念碑は写実的で力強いデザインとなった。ドラゴンと戦う聖ジョージは、戦死者の勇敢さを表し、磔のキリストは戦死者の精神性を表すものとして、そしてピエタは死んだ息子に対する母親の悲しみを表すものとして、記念碑に登場した²⁵⁾。

第二次大戦後、社会主義国を除いて、聖ジョージなどの騎士の姿で死者を描く記念碑は作られなくなり、記念碑の建立そのものも第一次大戦後に比べ

写真 22 三軍人記念碑



て減少した。それは、「アウシュヴィッツのあとでは、自己犠牲を讃えたり、精神性を強調して戦争をロマンチックに美化したりするのは適切と考えられなくなった」²⁶⁾ ためである。

騎馬像や軍人の立像、ピエタ以外で死者を追悼する方法として選ばれたのは、ゲルツ夫妻（Jochen Gerz and Esther Shalev-Gerz）による「対抗的記念碑」

写真 23 朝鮮戦争記念碑



写真 24 平和記念塔



(counter-monument) とマヤ・リン (Maya Lin) の御影石に死者の名前を刻むデザインであった【写真 21】。この二つは沈んでゆく形態という点で共通性を持つ。

1970年代から記念碑の新しい形態を模索していたゲルツは、物質性の外側に存在する芸術形態の可能性に着目し、物質的な痕跡を残さないような動的な芸術 (action-art) で記念碑を作成した。それが、1986年、ハンブルク

写真 25 平和の丘



写真 26 国立沖縄戦没者墓苑



に作られた「反ファシズムの警告記念碑」(Monument Against Fascism, War, and Violence-and for Peace and Human Rights)であった。これは、見る人に反省を促すことを目的として、反ファシズムに共感した人が記念碑の表面に署名(落書き)をすると、その部分が地面に沈むデザインとなっており、1993年11月10日に全てが消えた。ゲルツは、人々に特定の感情を持つように強いる巨大な台座のある記念碑ではなく、人々に想起したいという思いを留め続けるような記念碑を望んだ。それは、自制的であり、文字通りに自ら消えてゆくものであった²⁷⁾。

ベトナム戦没者記念碑(Vietnam Veterans Memorial)は、中国系アメリカ人の大学生マヤ・リンが設計し、1982年にワシントンD Cのナショナル・

写真 27 大國魂神社日露戦役記念碑



写真28 東京都慰霊堂



写真29 台湾物故者の霊と後備第一師団記念碑



モールに建てられた。地面に沈むように戦死者の名前が刻まれた黒い御影石は、敗戦という惨めな気持ちを喚起させるとして、多くの批判が寄せられた。この御影石に対抗するものとして、すぐそばに、三人軍人記念像 (The Three Soldiers) が建立された【写真22】²⁸⁾。マヤ・リンの簡素で新しいデザインとは対照的に、これは、朝鮮戦争記念碑【写真23】と同じようにリ

アリズム様式を用いていた²⁹⁾。ヤーコブ＝マークス (Christine Jakob-Marks) のグループは、ホロコースト記念碑のコンペに、85メートル四方のコンクリートのパネルに450万人のユダヤ人の名前を刻むとともに、150万人の不明者の名前を刻む余白を残しておくというデザインを提示した³⁰⁾。1995年に竣工した糸満市摩文仁の平和祈念公園の平和の礎も、マヤ・リンの記念碑と類似したデザインである。

摩文仁の平和祈念公園には、多くの記念碑が並ぶ。高さ45メートルの沖縄平和祈念堂【写真24】は、国道331号線から平和祈念公園に入って最初に目に付く記念碑である。塔の中には、山田真山設計の高さ12メートルの平和祈念像と「戦争と平和」の絵画が置かれている。そこから東へ進むと北側に韓国人慰霊塔があり、南側に平和祈念資料館が見える。平和祈念堂の向かいには平和の丘【写真25】が建ち、32府県の慰霊碑、国立沖縄戦没者墓苑がある【写真26】。このように慰霊塔が立ち並ぶ様子は、「慰霊塔の団地」と揶揄された³¹⁾。

記念碑の集積は戦後の平和祈念公園に限ったことではなく、日清・日露戦争後から顕著に見られた現象であった。例えば、明治以降、各地の神社に建てられた忠魂碑や招魂碑の一部は現在でも残されている【写真27】。東京

写真30 原爆死没者慰霊碑



都慰霊堂【写真28】は、関東大震災の犠牲者を祀る慰霊堂として建設され、後に、東京大空襲の犠牲者も合祀することとなった。慰霊堂のある横網町公園には、空襲犠牲碑や朝鮮人犠牲者追悼碑、児童弔魂像などが建てられ、築地西本願寺には台湾物故者の慰霊碑や後備第一師団記念碑【写真29】、凱旋釜の碑が木陰にひっそりと立っている。

こうした記念碑の集積は、記念碑論争を引き起こし続けている³²⁾。多くの場所で、過去においても、現在においても、誰が（建立主体・建立資金）・誰を（対象）・どこに（場所）・何を（デザイン）建てるのかという論争が続いている。

1949年、「広島平和記念都市建設法」が国会審議を通過すると、平和公園および平和記念館の建設が本格的に始まった。当時、中島公園の一角に残るドームと呼ばれていた産業奨励館跡を残すかどうか、などが議論される中で、東京都慰霊堂【写真28】のような供養塔が建てられるのが望ましいという意見が出されていた。しかし、都市計画を担当した丹下健三は、慰霊堂という案に激しく反対し、市民が集うための広場やコミュニティ・センターのような空間を作ろうと考えた³³⁾。

1952年、原爆死没者慰霊碑（Cenotaph for the A-bomb Victims）が竣工した

写真31 爆心地中心碑



【写真 30】。この慰霊碑について丹下は、「ここに安らかに眠る人びとの霊を、雨霜から守りたいという気持ちからできている。それがハニワのかたちをとることになったのである」³⁴⁾と述べている。デザインの次には、題字が問題になった。慰霊碑には、「安らかに眠ってください 過ちは繰り返しませんから」という題字が彫られた。この文法的主語の不在の文について、インド人法律家ラダビノード・パル (Radhabinod Pal) は、主語が原爆投下に関係した人々である場合には、罪はまだに償われていないとし、日本人の戦争犯罪である場合には、戦争の責任は日本人のみにあるのではなく西洋植民地主義にもあると主張した。パルの「語り」は広く流布し、模範的解釈となった。結局、Let all the souls rest in peace; For we shall not repeat the evil. と翻訳されたことによって、碑文の主語は碑の前に立つ「われわれ」であると解釈された³⁵⁾。

1954年に開園した平和記念公園には、その後も記念碑が増え続けた。1967年、広島市は公園内にこれ以上の工作物を設置しない方針を決めたが、

写真 32 被爆 50 周年記念事業碑



実際にはいくつかの記念碑が設置された。例えば、平和記念公園の外に置かれていた韓国人原爆犠牲者慰霊碑は、1999年に公園内に移設された。この慰霊碑は1970年に在日韓国人の有志らが建てたもので、建立当時から公園内に移す希望が広島市に寄せられていた。1990年から移設計画が進められたが、その際、この碑が韓国人だけを対象にしたものか否かが移設の障害の一つとなった。韓国民団（在日本大韓国民団）と朝鮮総連（在日本朝鮮人総連合会）、広島市が協議を重ねた上、1999年の移設に至った³⁶⁾。

長崎平和公園は、爆心地中心碑（三角柱）【写真31】のある中心地地区（爆心地公園）、原爆資料館のある資料館地区、平和祈念像のある祈念像地区に分かれている。中心地地区と式典が行われる祈念像地区は、400メートルほど離れている。中心地地区の爆心地中心碑のすぐ近くには浦上天主堂遺壁が残り、公園の南西部に平和を祈る子の像や長崎原爆朝鮮人犠牲者碑などの23の記念碑が存在する。

長崎では、忠魂碑訴訟（1982年）と母子像訴訟（1997年）が起こった。岡正治（1918～1994）は、1982年、「忠魂碑等維持管理補助金返還請求事件」を長崎地方裁判所へ提起した。岡は、牧師であり市議会議員であり、1979年に長崎原爆朝鮮人犠牲者碑建立の発起人となった。戦没者慰霊碑の維持管

写真33 人生の喜び



写真 34 乙女の像



写真 35 A コール



理を行う団体に市が補助金を交付するのは、政教分離に違反すると岡は主張した。1992年12月に出された二審の判決では違法に当たらないとして、福岡高等裁判所は原告の請求を棄却した。1994年、岡が死去し、裁判は終わった³⁷⁾。

母子像訴訟は、1997年、中心地地区に建てられた被爆50周年記念事業碑

写真36 平和



写真37 フォッシュュ像



に対するものであった【写真32】。この母子像は、1994年以降、長崎市の地元有識者たちによる「平和公園再整備検討委員会」によって、原爆落下中心碑に代わる記念碑として制作が検討されてきた。記念碑は、文化勲章を受章した長崎市出身の彫刻家、富永直樹（1913～2006）が設計を担当することになり、1997年8月9日の長崎原爆忌に除幕することが発表された³⁸⁾。し

写真 38 トラファルガー広場



かし、市民の反対を受け、結局、母子像は原爆落下中心地ではなく、公園内の別の場所に設置された。

1997年、市民らは、キリストを抱くマリアの像、すなわちピエタを想起させるこの像は、政教分離に違反するとして、市にこの像の撤去と伊藤一長市長に制作費1億4700万円を返還するように求めた。2004年10月12日、最高裁は市民の上告を棄却した。論議が続く中、2007年4月17日、伊藤前市長は、4選を目指して遊説を行っていたところに暴力団幹部の男に銃撃され、翌日、死亡した³⁹⁾。前市長の死によってこの論争は幕引きとなった。

ピエタのような宗教的なモチーフは繰り返し表れるというモッセらの主張の通り、母子像は、1980年代に長崎の平和公園に各国から寄贈された。祈念像地区には、1980年にチェコスロバキアから寄贈された「人生の喜び」【写真33】、1985年に中国から贈られた「乙女」【写真34】、ブルガリアから贈られた「Aコール」【写真35】、ソ連から贈られた「平和」【写真36】などがある。

20世紀後半、記念碑建立に際して、伝統的な宗教イメージと抽象的なデザインの葛藤は何度も見られた。広島原爆慰霊碑のデザインとして東京都慰霊堂が取り上げられたのはその一例である。日本における一つの記念碑の

写真 39 日本占領民間犠牲者記念碑



イメージは慰霊堂であり、その中で、ピエタは、日本の伝統的な宗教イメージと一致するとはいえないものの、浦上天主堂遺壁や大浦天主堂などが存在する長崎では、全く異質なアイコンではなかっただろう。しかし、多くのピエタは人々を見下ろすような高さには存在しない。コルヴィッツのピエタや、長崎の祈念像地区の記念碑のように、平和を祈念するピエタは台座なしか低い台座に置かれることが多い。それは、見る者に悲しみと反省を促すかのようなようである。反対に、トロカデロ広場のフォッシュ（Ferdinand Foch）【写真 37】やトラファルガー広場のネルソン（Horatio Nelson）【写真 38】のような大きな功績を挙げた政治家や軍人の像は、高い台座の上に置かれ、人々に見上げられることを前提としている。すなわち、台座の高さは、生前の権威や勝利の高揚感を示しているのである。

スターケン⁴⁰は慰霊碑（メモリアル）と顕彰碑（モニュメント）の違いを、前者は死者を想起するもので、後者は勝利を記念するものであると述べている。慰霊碑には死者のリストや特別なテキストが刻まれているのに対して、顕彰碑には説明書きが少なく匿名的であると区別している⁴⁰。ただし、ヨーロッパではエトワール凱旋門と無名兵士の墓の組み合わせやヴィットリオ・エマヌエーレ2世記念堂と無名兵士の墓の組み合わせの例や、日本の東京都

写真 40 爾靈山の碑



慰霊堂や靖国神社の例のように、顕彰と慰霊は明確に区別できるものではない⁴¹⁾。

厳密に区別することはできないが、慰霊碑と顕彰碑の違いは、テキストか非テキスト（デザイン）に表れている。そして、顕彰碑にはテキストが刻まれていない代わりに台座に装飾が施されていることが多い。ベルリンの勝利記念塔の台座にはデンマーク、オーストリア、フランスとの戦いを描いた3つのレリーフが埋め込まれている。ゴードン像【写真13】、ウェリントン像【写真14】、フリードリヒ像【写真15】、チャールズ1世像【写真38】の台座は彫像やレリーフで装飾されている。これに対して、セノタフやシンガポールの日本占領民間犠牲者記念碑【写真39】はわずかな文字が刻まれているだけである。

記念碑における慰霊と顕彰という二つの側面は、戦跡観光の二つの側面を表している。すなわち、犠牲者を追悼する慰霊の旅と勝利を讃える旅である。しかし、第一次大戦後まで黙認されていた、あるいは奨励されていた自

図1 旅順ヤマトホテル



国礼賛のナショナリズムの旅は、第二次大戦の多くの犠牲者を前にしては倫理的に許されない雰囲気の中に置かれていった。

5. 慰霊の旅と学びの旅

日露戦争後に盛んになった日本人の戦跡観光は、終戦を機に慰霊の旅と学びの旅へと移行した。日露戦争の激戦地であった旅順には、乃木希典の揮毫による爾霊山の碑【写真40】と表忠塔が建てられ、日露戦争の戦跡巡りの重要地点と見なされた。

1906年7月13日、東京高等師範学校・東京府立師範学校の一行が満洲韓国修学旅行へ向けて新橋を出発し、同年7月25日、朝日新聞社企画の満韓巡遊船ろせった号が横浜港を出航した。修学旅行の一行は、門司港から大連へ渡り、一方、ろせった号は大阪港を経て呉港へ寄航し、呉の海軍工廠と若松の製鉄所を見学した後、門司港を通って釜山へ到着した。平壤や旅順、奉天では日清・日露の戦跡を見学し、陸軍軍人から現地講話を聞き、日本人会開催の歓迎会に出席した⁴²⁾。

夏目漱石は、二代目満鉄総裁の中村是公の誘いを受けて、大陸への旅に

写真 41 ハルビン文廟



写真 42 有栖川宮威仁親王像



出かけた。漱石は、1909年9月2日に東京を出発し、大連・旅順・熊岳城・営口・湯崗子・奉天・撫順・長春・ハルビンを見学した後、平壤と京城を廻って、10月17日に東京へ戻った。漱石は、各地でヤマトホテルに滞在し【図1】、市内を見学した様子を「満韓ところどころ」として『朝日新聞』に掲載していたが、撫順の炭鉱見学をもって終わらせている。中国に対する漱

図2 大連大広場



写真43 勝利公園



石の関心はそれほど高くはなく、旅順の戦利陳列所についても、「A君の親切に説明して呉れた戦利品の一つを叙述していたら、此陳列所丈の記載も、二十枚や三十枚の紙数では足るまいと思ふが、残念な事に大抵忘れて仕舞つた」⁴³⁾と記している。

1920年代後半、ガイドブックには「聖地旅順」という言葉が登場した。

1920年代に日本で始まったバスツアーは1930年代には満洲でも実施されるようになり、旅順・大連・奉天・撫順・新京・ハルビンの一日・半日のツアーが開催された。1936年、満鉄の交通事業の部署が改名した大連都市交通株式会社は、戦跡記念地として忠霊塔や殉難塔への訪問を含むツアーを企画した。奉天では柳条湖や東京駅を真似て作られた奉天駅、大連では大広場や星ヶ浦、ハルビンでは文廟（孔子廟）【写真41】や中央寺院などがコースに入っていた⁴⁴⁾。

満州では西洋的な都市計画が実施された⁴⁵⁾。日本国内では、すでに1898年に西西郷隆盛像が、1900年に皇居外苑前に楠正成像が、1921年に東京の海軍参考館前に有栖川宮威仁親王像【写真42】などの西洋式立像が登場した⁴⁶⁾。このような人物像は、満州の広場や公園に相次いで建立された。星ヶ浦の後藤新平像、大連のヤマトホテル（現、大連賓館）前の大広場の大島義昌像【図2】、奉天のヤマトホテル（現、遼寧賓館）の前の大広場（現、中山広場）における明治三十七八年戦役記念碑（日露戦争勝利記念碑）、新京の西公園（現、勝利公園）の児玉源太郎像（北村西望制作）などが挙げられる。ヤマトホテルに宿泊することは、そのまま、当時の偉人の像を目の当たりにすることでもあった。そして、このホテルと人物像の風景写真はガイド

写真44 撫順戦犯管理所旧址



ブックに掲載されるとともに、ポストカードとしても流通した。現在はその復刻版がみやげ物屋で販売されている【図1】【図2】。これらの像は日本の敗戦とともに撤去され、中山広場と勝利公園には毛沢東像が建てられた【写真43】。

像の撤去に先立って、日中戦争の激化によって、日本人の戦跡観光は終わりを迎えた⁴⁷⁾。かつて日本の勝利に興奮した満洲への戦跡観光は、戦後、戦没者の遺骨収集や慰霊の旅へと変わった。日本政府による戦没者の遺骨収集は各地で1950年代から行われていたが、中国における遺骨収集は1972年の国交正常化まで行われなかった。国交正常化後も遺骨収集は頻繁に行われたわけではなかった。中国で文革が終わり、改革開放政策が進む中で、1984年、初めて民間団体による慰霊の旅が行われた。実施したのは、元哈達河開拓団員らによる「哈達河会」の人々30名であった⁴⁸⁾。1987年5月には、中国帰還者連絡会の代表16名が撫順戦犯管理所旧址の開館式に出席した⁴⁹⁾。

撫順戦犯管理所の前身は、日本軍が1936年に建てた監獄であった。1950年2月に戦犯管理所となり、969名の旧日本兵が戦犯として収容され、溥儀もここに収容された。1956年から1964年にかけて釈放された人々は、帰国後、中国帰還者連絡会を結成した。1987年の開館式に際して、中国帰還者

写真45 ひめゆりの塔



連絡会は「向抗日殉難烈士謝罪碑」という記念碑を贈った【写真44】。

このような慰霊碑の建立や遺骨の収集を行うカタルシスの旅に加えて、ノスタルジアの旅も見られるようになった。戦前、大連やハルビンなどで幼少期を過ごした人々が1980年代に母校を訪問するイベントを行っている⁵⁰⁾。

近年では、中国大陸での生活経験のない人々もこれらの地域に出かけている。それらのツアーには、「昔日のノスタルジー」「レトロな街並み」「旧懐の大地」などの言葉が使われ、旅順訪問と旧ヤマトホテルへの宿泊・訪問、溥儀が住んだ宮殿（偽満皇宮博物館）などが組み込まれているが、ハルビンの731部隊の跡地（侵華日軍第七三一部隊遺址）や撫順の戦犯管理所などは日程に組み込まれることは少ない⁵¹⁾。大連やハルビンへの観光において、過去の罪の意識を意識しながらも、日露戦争勝利後の高揚感を擬似体験することは、ノスタルジーの一部であるといえる。

慰霊の旅が年配者たちの過去を懐かしみ、過去の罪の意識を洗い流す一方、学びの旅は若い人々に戦争の記憶を刻み込む。戦後の修学旅行の訪問地は、京都・奈良が中心であった。1980年代から平和学習を目的とした広島・長崎への修学旅行が行われるようになり、80年代半ばに、修学旅行で航空機利用が可能になると、沖縄が修学旅行先として注目されるようになっていった。

沖縄修学旅行が開始される前、日本では「沖縄病」の患者が増加していた。「沖縄病」の症状は、沖縄戦について多くの人に知ってもらわなければならない、沖縄のために何かしなければならぬという強い感情を抱くことであるとされる。この症状は、「慰霊塔の団地」が形成され始めた1960年代から見られた。1947年、沖縄陸軍病院第3外科壕跡に、ひめゆり学徒隊227名を祀った記念碑【写真45】が落成すると、1953年に『ひめゆりの塔』が映画化され、ひめゆりの塔は一大観光地となった。そして、バスガイドたちはひめゆり学徒隊の悲劇について、哀調を帯びた声で語り、観光客の涙を誘った。1960年代には、南部戦跡の観光化が始まった⁵²⁾。

沖縄修学旅行を実施したほとんどの高校で、平和祈念公園・ひめゆりの塔・

ガマなどの南部戦跡を見学し、体験者の話を聴講している⁵³⁾。2009年度には、沖縄が高校の修学旅行先の一位になった。そのうち、見学先の1位から3位に首里城・ひめゆりの塔・平和祈念公園が含まれる。また、広島のパネル公園は17位、長崎の平和公園は20位に入っている⁵⁴⁾。

東京都教育委員会は、1992年度から修学旅行における飛行機の使用を許可した。この年に沖縄修学旅行を決定した都立雪谷高校は、修学旅行の目的の一つに「太平洋戦争とで戦場となった“沖縄”を訪れることにより、戦争について考え、平和の尊さを知る」ことを掲げた。修学旅行まで度重なる事前学習を行っていることが報告されている。2学年（1995年度）での実施を目指し、1学年（1994年度）には春休みの課題として、生徒は沖縄関係の本を5冊調べてカードを作成し、2学年の夏には映画『ひめゆりの塔』を鑑賞し、感想文を提出したという。1日目の首里城見学を経て、2日目はガマを見学し、「平和宣言の集い」を朗読した。これが修学旅行の中心的行事であった3日目はタクシーでの班別行動、4日目、ひめゆり資料館などを見学となっている⁵⁵⁾。

他の高校でも念入りの事前学習が実施され、学校に戻ると感想文の提出が課題として出される⁵⁶⁾。優秀な感想文は、学校の公式ウェブサイトで公開

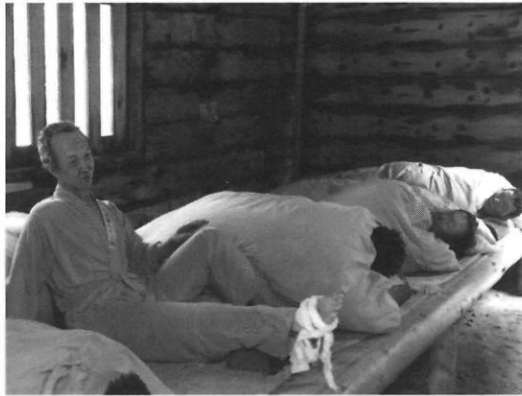
写真 46 ホアロー収容所



写真 47 青島德国監獄旧址



写真 48 博物館網走監獄



されることもあれば、ひめゆり平和祈念資料館へ送られ、『感想文集ひめゆり』に掲載されることもある。感想文の提出で学びの旅は締めくくられる。生徒たちは、資料館やガマの中で戦争体験を聴講し、さらに映像を鑑賞し、それに対する感想を求められる。語りに耳を傾け、疑似体験することで戦争の記憶を共有することが可能になる。

写真 49 博物館明治村金沢監獄正門



写真 50 日光江戸村小伝馬町牢屋敷



沖縄の戦跡観光、長崎・広島への観光とガリポリやワーテルローへの観光が比較されることがあるが⁵⁷⁾、戦跡という言葉で表される場所であっても、根本的に二つは別の文脈で理解される必要があり、単純に比較することは難しい。第一次大戦後に広く行われたソムやイーブル、ガリポリへの戦跡観光は、戦勝国の人々が中心となっていたもので、日露戦争後の旅順観

光もこのカテゴリーに入れられるだろう。他方、第二次大戦後の日本の戦跡観光は、慰霊の旅と学びの旅という特徴はあるが、揺れ動く「戦争体験」⁵⁸⁾の語りの中で、明確な位置づけがなされているとはいえない。観光客にとって、戦跡においてどのような行動を取ることが望ましいのかは曖昧なままである。その曖昧さは、平和公園に集積する記念碑に象徴されている。どこまで記念碑を作り続ければ罪は償われるのか、どの碑の前で追悼するのが最も正しいのかは誰も答えられないのである。

6. おわりに

戦跡と並んで監獄跡や収容所跡も現代では観光名所となっている。ポーランドのアウシュヴィッツ強制収容所が常に混雑しているのは有名な話であり⁵⁹⁾、アルカトラズはサンフランシスコ観光の目玉の一つである。ハノイのホアロー収容所【写真46】や旅順日俄監獄、青島德国監獄旧址【写真47】は外国人も多く訪れる観光地である。日本では網走刑務所が1983年に博物館網走監獄として公開され【写真48】、金沢監獄の一部は、愛知県の博物館明治村に移築された【写真49】。観光客がこの正門から外に出ると、「おつとめ、ご苦労様です」とガイドが声をかけたり、観光客同士が声を掛け合ったりする様子を目にするができる。日光江戸村の小伝馬町牢屋敷【写真50】は牢獄をテーマパークに取り入れたものである。このように監獄や収容所、戦跡などが商業化される過程で「暴力」の記憶が薄まってゆく現象を、荻野昌弘は「消毒」と呼んだ⁶⁰⁾。

「消毒」が進む場所と進まない場所の違いは何か。それは、人の出入りの頻繁さに左右される。例えば、多くの人々が出入りする建物では、換気が行われ、建物の匂いや湿気が失われる。さらに、人が訪れるようになると、建物の改修も行われるため、古い建物特有のカビや埃の匂いや湿気はさらに薄れてゆく。その場所で何が行われていたのか、つまり、人がそこで殺されたかもしれないという想像力を掻き立てるのは、視覚や聴覚よりも嗅覚や触覚

のほうが強い。古い建物の空気と体臭の染み付いたような展示品を見たときに、背筋が寒くなるような感覚に囚われるのではないだろうか。

人の死は、最も心を揺さぶる展示物の一つである。「思いもよらないようなもの、グロテスクなもの、暴力的なもの」⁶¹⁾の見本市であるホロコースト博物館は、この点で非常にインパクトのある博物館である。ホロコースト博物館では、大量の死体の写真が展示され、連行される人々の映像が流れているが、そこに匂いや湿度はなく、遙か昔に遠くで行われていた暴力に悲しみや憤りを感じることはあっても、恐怖感を覚えることはない。沖縄を訪れた多くの修学旅行生は、資料館で話を聞いてもそれほど恐怖を感じることはなかったが、ガマの暗闇を体験したときに、怖いと感じたと記している。視覚と聴覚への偏重は、現代社会の一つの特徴であるがゆえに、それ以外の感覚を必要とする場に直面すると、不安な気持ちが湧き上がるのかもしれない。

記念碑は見えないことが特徴であるとミュージル (Robert Musil) は述べている⁶²⁾。記念碑は除幕式までは争いの種となりうるが、除幕式を終えるととたんに存在感を失ってしまう。現代の観光客は記念碑の前で写真撮影するため、記念碑には存在感があるように覚えるが、観光客にとって、その碑が何を表しているのかはさほど重要なことではない。広い観光地の中で撮影する場所が、記念碑の前であっただけとも考えられる。記念碑の前には、除幕式などの式典を行うことができる空間 (広場) が作られている。その広場は、観光客にとって最適な撮影場所なのである。

註

- 1) John Lennon and Malcolm Foley, *Dark Tourism : the Attraction of Death and Disaster*. South-Western Cengage Learning, 2001 (2000), フンク・カロリン「"学ぶ観光"と地域における知識創造」『地理科学』2008年。ダーク・ツーリズムについての論集には、Chris Ryan (ed.) *Battlefield Tourism: History, Place and Interpretation*. Elsevier, 2007. や Richard Sharpley and Philip R. Stone (eds.) *The Darker Side of Travel: the Theory and Practice of Dark Tourism*. Channel View

- Publications, 2009. などがあり、これらの論集の中では、thanatourismではなく、dark tourism が用いられている。
- 2) 藤原帰一『戦争を記憶する－広島・ホロコーストと現在－』講談社現代新書、2001年、146ページ。
 - 3) 本稿は、2006年以降、断続的に行ってきた記念碑の調査に基づく。写真は、筆者が撮影したものである。記念碑には、銅像（立像、騎馬像、胸像）やプレート、碑碣など様々な形態があるが、すべてを総括して記念碑と記す。また、本稿では、近代以降の戦争を主として取り上げる。
 - 4) Lennon & Foley 前掲書、3ページ。
 - 5) Mark Piekartz, "It's Just a Bloody Field! Approaches, Opportunities and Dilemmas of Interpreting English Battlefields." Chris Ryan (ed.) *Battlefield Tourism: History, Place and Interpretation*. Elsevier, 2007, p.29-48.
 - 6) A.V. Seaton, "War and Thanatourism: Waterloo 1815-1914." *Annals of Tourism Research*. 26 (1), 1999, p.130-158.
 - 7) ピアーズ・ブレンドン『トマス・クック物語：近代ツーリズムの創始者』中央公論社、1995年、126ページ。
 - 8) 同上、436～438ページ。
 - 9) David W. Lloyd, *Battlefield Tourism: Pilgrimage and the Commemoration on the Great War in Britain, Australia and Canada, 1919-1939*, Berg Pub Ltd 1998, p.28-30.
 - 10) Peter Slade, "Gallipoli thanatourism: The Meaning of ANZAC" *Annals of Tourism Research* 30 (4), 2003, p.787.
 - 11) "Gallipoli Battlefield" <http://www.anzactour.net/allaboutgallipoli.html> (9月27日アクセス)
 - 12) Slade 前掲論文、792-793ページ。
 - 13) ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体－ナショナリズムの起源と流行』リプロポート、1996年、24ページ。
 - 14) 「自由」と「統一」を表す二つのクアドリガは1911年の竣工当初は存在しなかったが、1907年にコンペが行われ、1927年に完成した（碑文より）。
 - 15) ジョージ・モッセ『英霊－創られた世界大戦の記憶』柏書房、2002年、98～100ページ。小島崇「近代イギリスにおける戦争の記念・顕彰行為－対仏戦争～第一次世界大戦の記念碑」若尾祐司・羽賀祥二（編）『記録と記憶の文化史－史誌・記念碑・郷土』名古屋大学出版社、2005年、219～220ページ。
 - 16) Andrew Kershman, *London's Monuments*. Metro Guides, 2007, p.312.
 - 17) Peter Carrier, *Holocaust Monuments and National Memory Cultures in France and Germany since 1989*. Berghahn Books, 2005, p.15-17.
 - 18) 1953年に現在の場所に移築された。
 - 19) 光永雅明「銅像の貧困－19～20世紀転換期ロンドンにおける偉人銅像の設立と受容」阿部安成・小関隆・見市雅俊・光永雅明・森村敏己（編）『記憶のかたち－コメモレイションの文化史』柏書房、1999年、84～89ページ。

- 20) 光永前掲論文、107 ページ。
- 21) 鈴木将史「ドイツ近代国民記念碑について（その1）"フリードリヒ大王記念像"から"ヘルマン記念像"まで」『人文研究』111号、2006年、45 ページ。
- 22) Sergiusz Michalski, *Public Monuments: Art in Political Bondage 1870-1997*. Reaktion Books LTD, 1998, p.69-73. ラインホルト・ベガス (Reinhold Begas) が制作したビスマルク像は1901年に作られた当初は、国会議事堂の近くに置かれていたが、1938年に現在の場所に移築された。
- 23) 久保田浩「ドイツにおける戦没者を巡る追悼空間－ノイエ・ヴァッヘ」再考』『現代宗教 特集 慰霊と追悼』東京堂出版、2006年。
- 24) 米沢薫『記念碑論争：ナチスの過去をめぐる共同想起の闘い（1988～2006年）』社会評論社、2009年。Carrier 前掲書。
- 25) Jay Winter, *Sites of Memory, Sites of Mourning: the Great War in European Cultural History*. Cambridge University Press, 1995, p.85-90.
- 26) イアン・ブルマ『戦争の記憶－日本人とドイツ人』ちくま学芸文庫、2003年、363 ページ。社会主義国の記念碑については、高山陽子「社会主義リアリズムの系譜－近代中国におけるモニュメントを中心に」『国際関係紀要』（第18巻1・2合併号、2009年）で論じた。
- 27) James E. Young, *At Memory's Edge: After-Images of the Holocaust in Contemporary Art and Architecture*. Yale University Press, 2000, p.124-130.
- 28) マリタ・スターケン『アメリカという記憶－ベトナム戦争、エイズ、記念碑的表象』未来社、2004年。
- 29) Daniel Abramson, "Maya Lin and the 1960s: Monuments, Time Lines, and Minimalism." *Critical Inquiry* 22 (4), 1996, p.679-709.
- 30) Carrier 前掲書、128 ページ。最終的にこのデザインは1995年にコール首相に却下された。
- 31) 多田治『沖縄イメージを旅する－柳田國男から移住ブームまで－』中公新書ラクレ、2008年。財団法人・沖縄県平和祈念財団『沖縄の慰霊塔・碑』2007年。
- 32) Kirik Savage, *Monument War: Washington, D.C., the National Mall, and the Transformation of the Memorial Landscape*. University California Press, 2005 など。
- 33) 丹下健三「広島計画 1946～1953 とくにその平和会館の建設経過」『新建築』1954年1月、7 ページ。
- 34) 同上、14 ページ。
- 35) 米山リサ『広島 記憶のポリティクス』岩波書店、2005年、22～24 ページ。
- 36) 『朝日新聞』1999年8月3日
- 37) 西村明『戦後日本と戦死者慰霊－フルイとシズメのダイナミズム』有志社、2006年、134～135 ページ。
- 38) 『朝日新聞』1996年3月12日
- 39) 『朝日新聞』2007年4月18日
- 40) スターケン前掲書、91 ページ。

- 41) 西村前掲書、29 ページ。
- 42) 有山輝雄『海外観光旅行の誕生』吉川弘文堂、2002 年
- 43) 夏目漱石「満韓ところどころ」『漱石全集 8 卷』岩波書店、1966 年、205 ページ。旅順博物館は、関東都府府が中国各地から集めた 5 万点ほどの展示品を持っていた。幼少時代を大連で過ごした松原一枝は、小学校の遠足で旅順を訪ね、旅順博物館のミイラを見たと記している。松原一枝の『幻の大連』（新潮新書、2008 年）には、1920 年代から 30 年代にかけて、日露戦争遺跡巡りは満州に住む人々にとっては修学旅行の定番となっていたことが記されている。
- 44) 高媛「"楽土"を走る観光バスー 1930 年代の"満洲"都市と帝国のドラマトウルギー」『岩波講座 近代日本の文化史 6 拡大するモダニティ』岩波書店、2002 年、228～231 ページ。日露戦争後、日本国内でも観光化が急速に進んだ。第一次大戦後、各地にホテルが建設された過程は、砂本文彦『近代日本の国際リゾートー 1930 年代の国際観光ホテルを中心に』（青弓社、2008 年）に詳しく論じられている。
- 45) 西澤泰彦『日本植民地建築論』（名古屋大学出版会、2008 年）
- 46) 像の建立は東郷平八郎を中心に計画され、伊東忠太が全体を設計した。高さ 15 メートルの柱の上に建てられた像は、ロンドンのネルソン記念柱と対比されるものであったという（碑文より）。1984 年に旧有栖川宮威仁の別邸で、戦後、高松宮宣仁から福島県へ寄贈された天鏡閣に移築された。
- 47) 高媛前掲論文、223 ページ。
- 48) 『朝日新聞』1984 年 10 月 2 日
- 49) 『朝日新聞』1987 年 5 月 6 日
- 50) 坂部晶子『「満洲」経験の社会学ー植民地の記憶のかたち』（世界思想社、2008 年）。ただし、坂本によると「ノスタルジアの充足」といえるような故郷再訪は、全ての人々がかつての故郷を気軽に訪問できるわけではないという。
- 51) 旧ヤマトホテルは、現在の中国のホテル基準の三ツ星から四ツ星であり、最高級のホテルというわけではない。旧満鉄本社の建物は、大連鉄道有限責任会社として使われており、日本人観光客は、車から降りて建物前で写真撮影して去ってゆくことが多い。731 部隊跡地や撫順戦犯管理所は郊外にあるため、旅程に組み込みにくいという理由もあるが、展示物に日本語表記がなく、日本人観光客が鑑賞しにくいという理由も挙げられる。
- 52) 北村毅「"沖縄病"患者の民族誌ーひめゆりの塔と"復帰"にいたる病」蔵持不三也（監修）『エコ・イマジネールー文化の生態系と人類学的眺望』言叢社、2007 年、273～296 ページ。
- 53) 高橋順子「沖縄修学旅行の変遷ーとりまく状況と選ばれる理由」『日本女子大学人間社会研究科紀要』12 号、2006 年、35～39 ページ。
- 54) 財団法人日本修学旅行協会「全国の高等学校国内修学旅行の実態調査」
<http://www.jstb.or.jp/research/pdf/highschool2009.pdf>（2010 年 8 月 23 日アクセス）

- 55) 赤石英夫「全員が書いた"平和宣言"」『歴史地理教育』1996年11月号、70～72ページ。
- 56) 浅井紀子「心に響く平和学習の創造をめざして：沖縄修学旅行のとりくみ」『歴史地理教育』2006年6月号、54～57ページ。
- 57) Malcolm Cooper, "Post-Colonial Representations of Japanese Military Heritage: Political and Social Aspects of Battlefield Tourism in the Pacific and East Asia." Chris Ryan (ed.) p.85-86.
- 58) 福間良明『「戦争体験」の戦後史－世代・教養・イデオロギー』中公新書、2009年。
- 59) William F.S. Miles, "Auschwitz: Museum International and Darker Tourism." *Annals of Tourism Research* 29 (4) , 2002, p.1176.
- 60) 荻野昌弘「文化遺産への社会学的アプローチ」荻野昌弘（編）『文化遺産の社会学－ルーブル美術館から原爆ドームまで』新曜社、2002年、7ページ。
- 61) Lennon and Foley 前掲書、157ページ。
- 62) Robert Musil, "Denkmale" in *Gesammelte Werke II*, 1978. Carrier 前掲書、15ページからの引用。